永野郷を通る古道の歴史（資料編）

貞昌院住職　亀野哲也　http://teishoin.net

歴史的変遷

■古代

12 万年前　　下末吉海進
2 万年前　　海面低下
6 千年前　　縄文海進

海進、海退により地殻の隆起と火山灰の堆積とでできた陸丘が激しく浸食、谷をつくり、丘陵を形成。

タウンニュース　神奈川県内全域・町田市をネット　県内でも指折りの地域新聞です

2007年8月17日号

県立境川遊水地公園

12.5万年前の貝化石発見

藤沢市内の小中学生の校外学習の場に

大量の貝化石が見つかった遊水地の現場

８月４日に一部開園した「県立境川遊水地公園（藤沢市今田、横浜市戸塚区、泉区）」の敷地内から12万５千年前の貝を中心とした化石が大量に見つかっていることがわかった。化石や地層のはぎとり標本は、同公園内の「境川遊水地情報センター」で展示されている。

化石が見つかったのは、現在整備中の下飯田遊水地（横浜市泉区）。調査した神奈川県立生命の星・地球博物館（小田原市）の学芸員田口公則さんらによると、地層上層部から、現在は台湾以南に生息する貝「タイワンシラトリ」の化石が見つかったことや、火山灰などから、12万５千年前の温暖期「下末吉海進」時代と推定。現場一帯は水深約10メートルの内湾であったことが考えられるという。

絶滅種「ブラウンスイシカゲガイ」

ことが考えられるという。

地層からは大きくわけて３つの貝化石群が見つかっており、これまでに約１００種の貝や、絶滅種の「ブラウンスイシカゲガイ」や、ホオジロザメの歯なども発見されている。地層のはぎとり標本は遊水地情報センターで見られる。

子どもたちの校外学習の場に

下末吉期の海岸線
（県立生命の星・地球博物館2004ワークテキストより）

化石の発見を受け、藤沢市教育委員会は、藤沢市内の小中学生の校外学習の場として活用を開始。これまでに藤沢市内の4小学校と、6中学校が化石採集を行った。今後も校外学習の場として活用していく方針。県藤沢土木事務所によると、現場は工事中で危険なため、一般の立ち入りは禁止としている。

また、湘南台文化センターこども館では９月９日（日）の午前10時から午後２時まで、藤沢市内の小中学生と保護者計20人を対象にした貝の化石発掘の野外学習を実施する。申し込みは８月30日（木）まで。問い合わせは、電話０４６６（４５）１５００・こども館まで。

※本文中の日付については上記掲載日のままとなっておりますので、ご注意下さい。

永野は多摩丘陵からのびひろがる低丘陵の南端に位置。その主陵が武相境。大岡川をはさんで三浦丘陵に続いている。
丘陵基盤の屏風が浦層から暖流性のハイガイ、ウミニナ、ホトトギスガイ、シズクガイ、ユウシオガイ、ブドウガイなどの貝化石約 20 種類ほど出土。

＜貞昌院裏山から出た二枚貝・亀野撮影＞

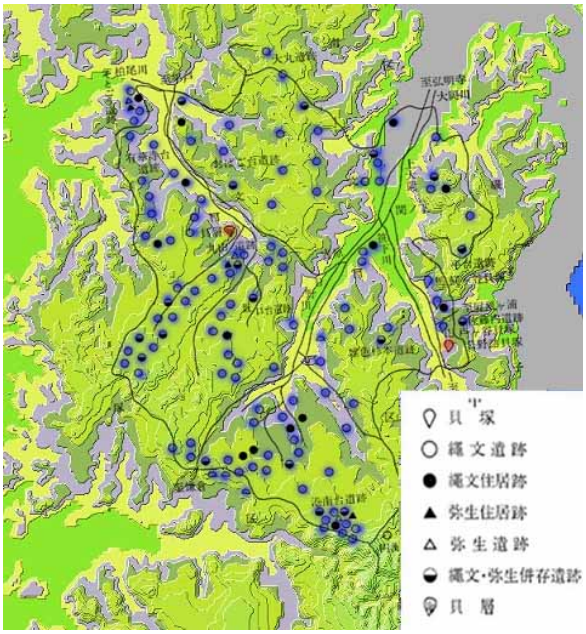
■縄文～弥生時代

弥生遺跡は立地条件から縄文期の遺跡に含まれていることが多い。谷戸田に面した段丘に土器片が散布しており、各所で農耕生活が営なまれていたと推測される。

永野には貝塚は存在しないが、黒曜石の矢鏃数個と凹石、縦形石七、砥石、打製・磨製石斧が出土。

■古墳時代

土師器の分布は、上永谷付近、中里、有華寺台、芹が谷などに縄文・弥生式土器片に混じって散見される。
永野では大規模の古墳は見受けられない。
しかし円墳とみなされる○○塚という名称でよばれている墳丘の塚は各所に存在。
開発によって潰滅してしまったものや、中世または近世による経塚や信仰の塚に対比される塚もあると考えられる。



２．鎌倉郡東縁を通る武相国境

現在の港南区エリアは、東半分が武蔵国、西半分が相模国である。

武相国境のうち、港南区を通る部分は「七里堀」とも称された。(『新編相模風土記稿』)

国境線は追浜～瀬谷までは分水嶺（＝山稜線）　「水流れる境」『新編武蔵風土記稿』

・・・・・東側に降った雨は大岡川⇒東京湾へ、　西側に降った雨は柏尾川⇒相模湾へ

瀬谷以北は境川が国境線

武相国境＝大和朝廷の勢力が鉄器文明を広めながら通過した動脈路（鍛冶ヶ谷、たたら場）

鼬川沿いには金のつく地名が多い。金井村、金沢、金谷（横須賀）、金谷（房州）

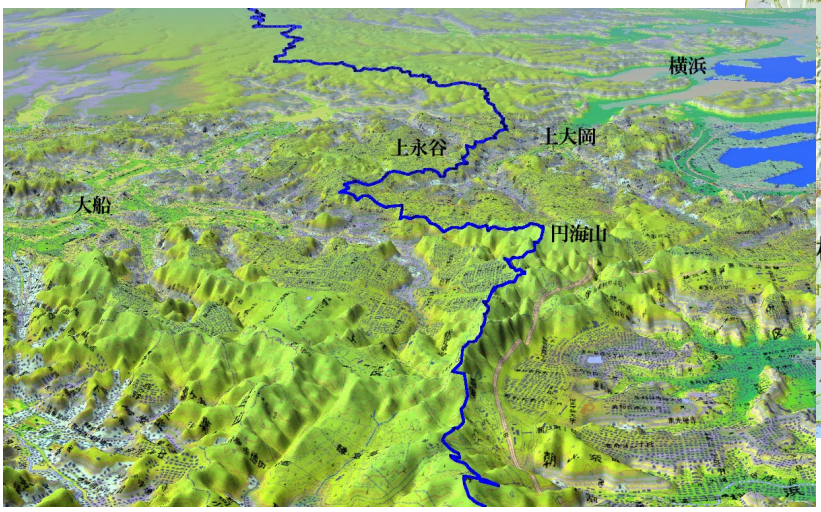
日本武尊東征路、武器の輸送、製造、修理

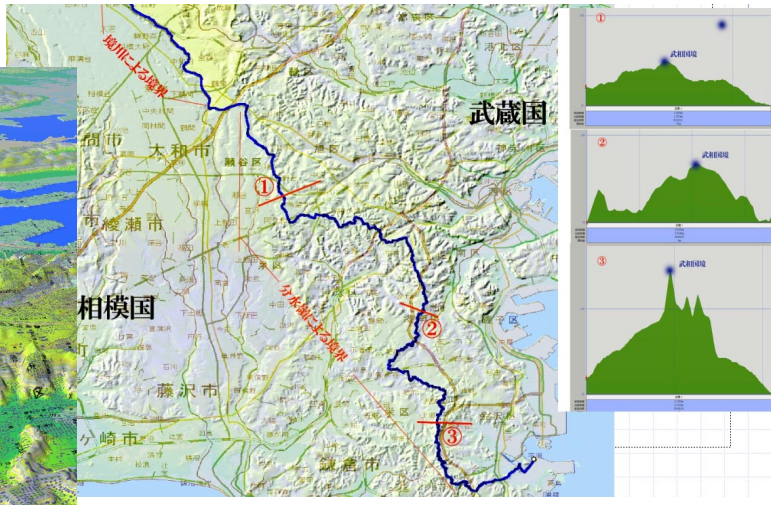
港南区には白山神社が多い。白山神社は鉱滓と関係が深い。

栄区上郷町「カナクソ（鉱滓）」地区、「鍛冶ヶ谷」

7 世紀～9 世紀前半にかけて丘陵地域一体を掘削して平地をつくり、製鉄操業を行っていた。

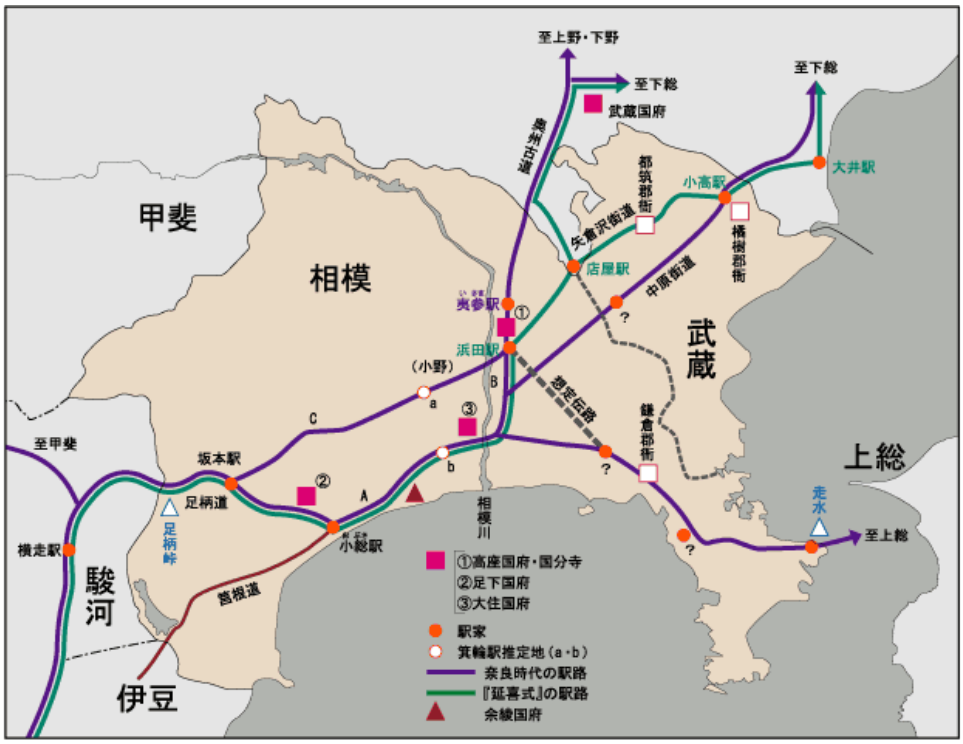
鍛冶ヶ谷式横穴古墳



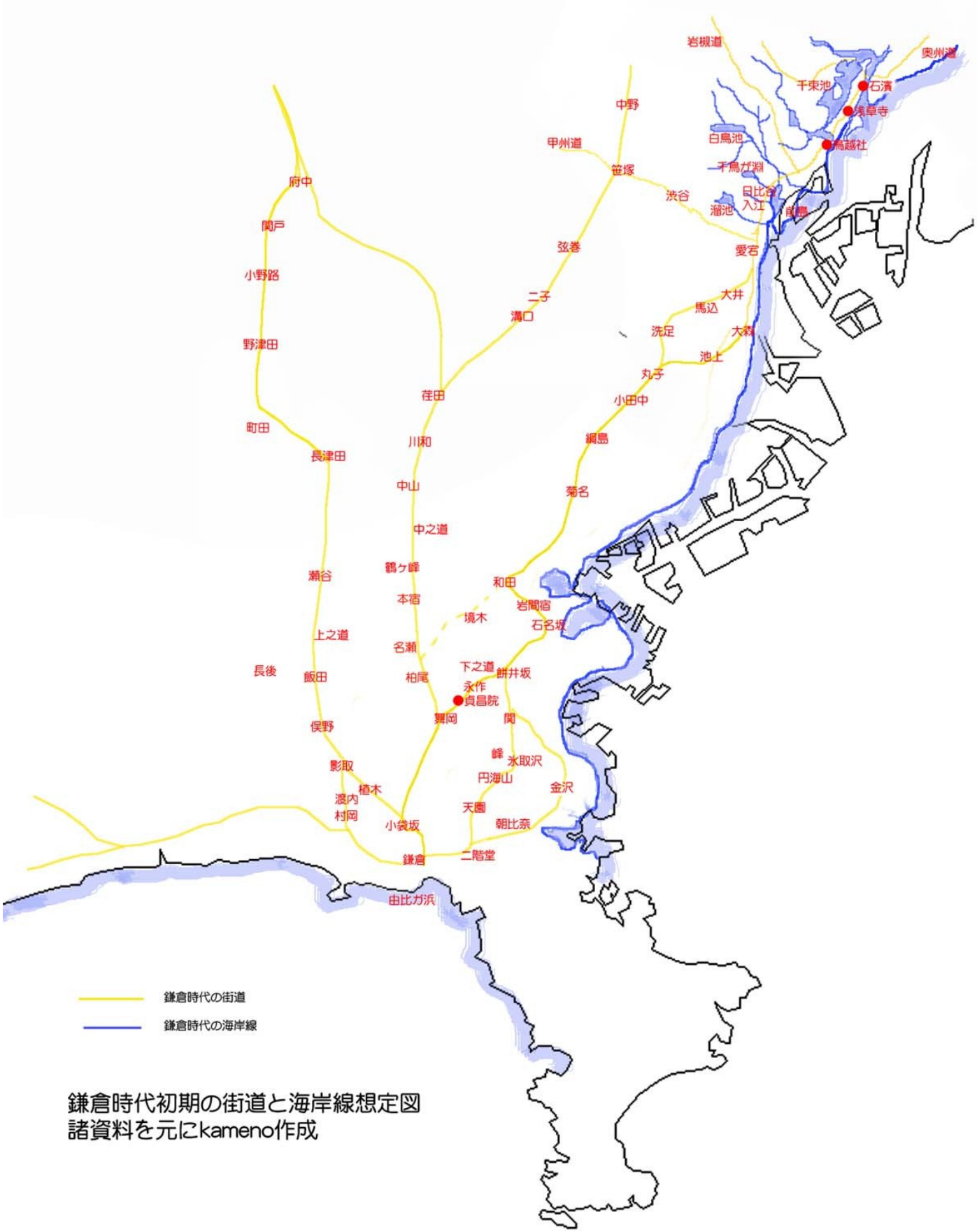


■奈良時代と平安時代の駅路

（延喜式とは、平安時代中期に編纂された律令の施行細則で、三代格式の一つである）



■鎌倉時代初期の街道と海岸線想定図



■かまくら古道の特徴

「けもの道」「黒曜石の道」「稲作の道」
頼朝により整備され、平常時は流通の経路として、また、「いざ鎌倉」として整備された。「鎌倉道」「鎌倉街道」とも呼ばれる。低地を避け尾根伝えの道を、しかも最短になるよう結ぶ。幅は 6～9 尺程の広い道。

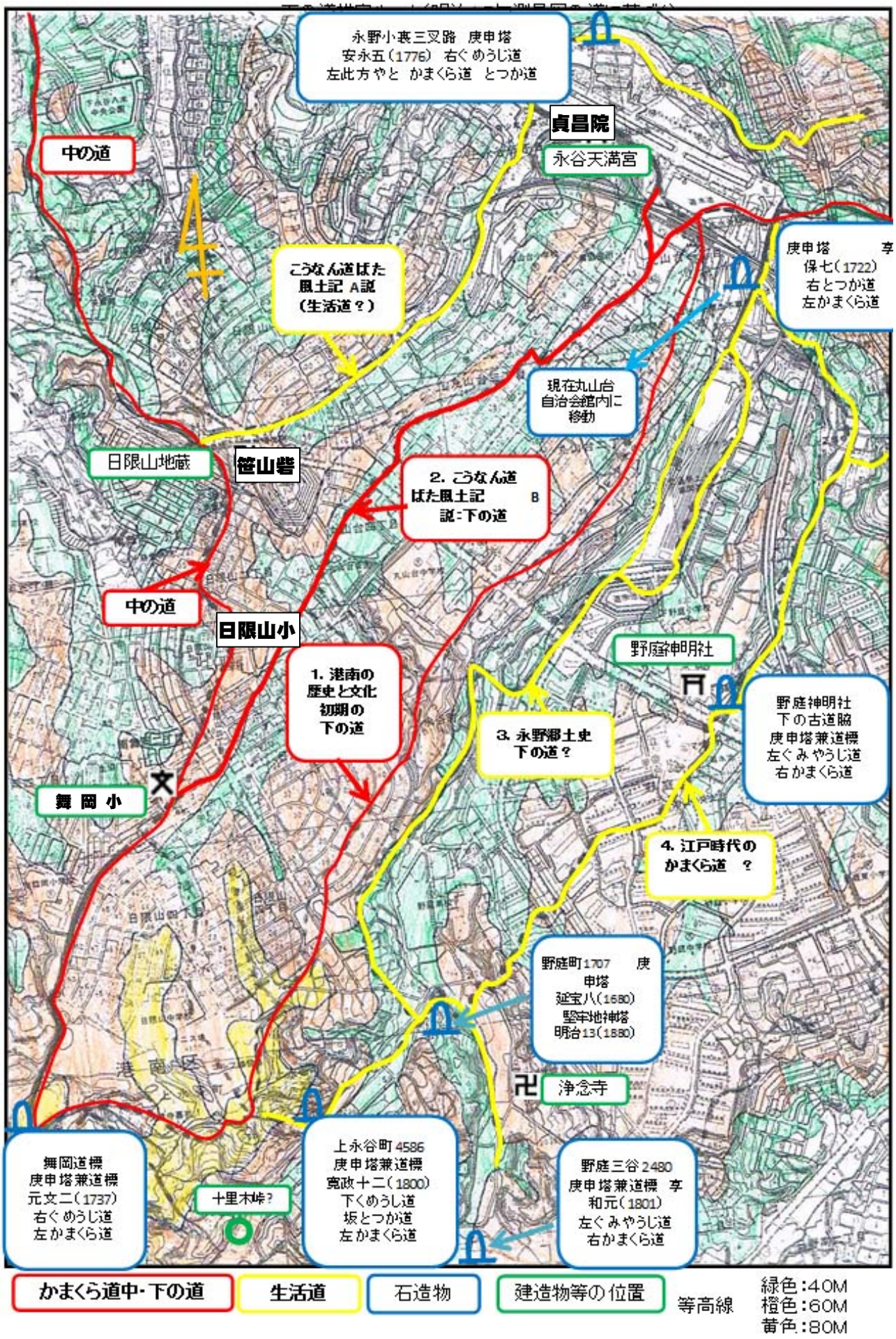
上之道（上路）：武蔵府中-関戸-藤沢-鎌倉
新田義貞の鎌倉攻め進撃路
中之道（中路）：武蔵府中-鶴ヶ峰-名瀬-小菅谷鼬川-鎌倉
頼朝が奥州平泉侵攻の際通過
・畠山重忠滅亡の地
下之道（下路）：下総、上総-浅草-鶴見-保土ヶ谷-弘明寺-餅井坂-大久保-馬洗橋-日限山
⇒中之道と合流
「鎌倉古道、小菅谷村本郷六村の一なり、鎌倉道西南の方を通ず（幅二間よりニ間半に至る、又古道と称するあり、南方笠間村界にて今の道より北に折れ村の中央を貫き永谷村に達す幅六尺より九尺に至る、按ずるに正保の国図には此道を本道とす）」『新編武蔵国風土記稿』
◆政子が馬を洗ったとされる馬洗橋
「馬洗川南北に貫けり、幅三間、元禄国図にも馬洗川と載す。鎌倉古路係りし頃此流れにて馬を洗いしにより此名ありと云ふ」『新編相模風土記稿』
◆頼朝・政子の祈願所としての弘明寺、尼将軍自刻座像を祀る乗蓮寺、
岩難坂の正子の井戸

早駆けの道　鎌倉武士が「いざ鎌倉」のとき、馬で鎌倉へ駆けつけるための道。
下永谷-日限山-舞岡-小菅ヶ谷-笠間-常楽寺-小袋谷-鎌倉

七里掘（武相国境沿の道）「山堺に七里堀と云ありここ爰より吉原、松本、久保、最戸、別所、中里の六ケ村を経て引越村（六ッ川）に通じる里程七里許を以って七里堀と唱ふ。この古道はかまくら海道なりしか東海道開けてよりこの道は廃し、今は小径残れり、.....」『新編武蔵風土記稿』

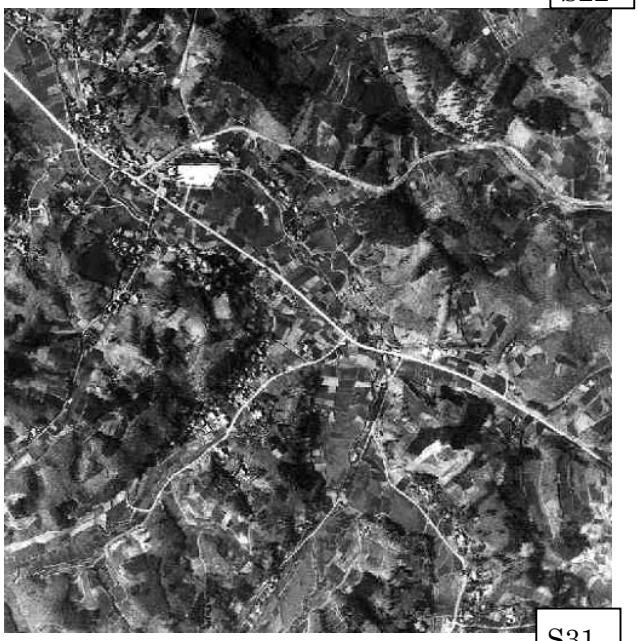
港南区内の石造物(石塔)
（1）形態・信仰による分類
【形態】　宝塔、宝篋印塔、五輪塔、燈籠、層塔、板碑、磨崖仏、石祠、顕彰碑、記念碑、道標
【信仰】　庚申塔、地神塔、道祖神、供養塔（出羽三山講供養塔、木曾御岳講供養塔、冨士講供養塔）、日・月待塔、念仏塔（百万遍念仏塔、寒念仏塔）、無縁塔、鳥居

■永野地区を通る古道の歴史的変遷　（港南歴史協議会資料）



航空写真で見る永野の街の変遷

S22


S31

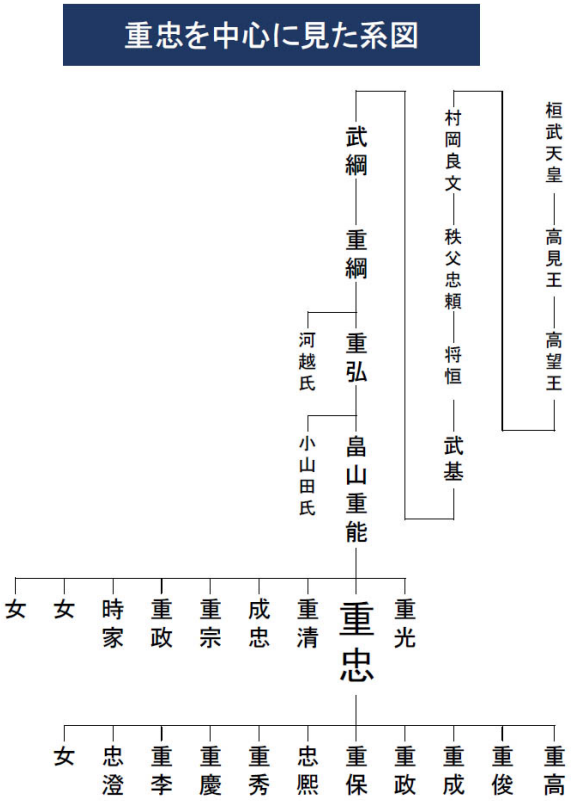
S43

S52

S63

H17

畠山重忠関連略歴



1195 年　6 月 25 日　頼朝、鎌倉へ向けて下向
　　7 月 8 日　頼朝、鎌倉へ到着
1198 年　12 月 27 日　稲毛重成が亡妻を供養
　　頼朝この日帰途落馬す
1199　1 月 13 日　頼朝、重忠に後事を託し死去
　　1 月 26 日　頼家、17 才で将軍の跡を継ぐ
1200　1 月 18 日　重忠、源頼家に椀飯を献じる
　　2 月 2 日　重忠、梶原景時の余党勝木則宗が捕らえるのを助ける
1202　7 月 22 日　頼家、従二位征夷大将軍となる。
1203　9 月 2 日　比企能員、頼家と北条氏打倒を謀り、名腰亭で討たれる。
　　重忠追討軍に加わる
　　9 月 7 日　実朝、従五位下征夷大将軍になる
　　11 月 15 日　重忠ら、鎌倉中の寺社奉行になる
1204　1 月 28 日　重忠が北条時政を破る旨のうわさが京都に伝わる（明月記）
　　7 月 18 日　頼家(23 歳)伊豆修善寺で謀殺される
1205　1 月 13 日　重忠・重保父子の勘当が解ける(平某書状案、島津家文書)
　　6 月 19 日　重忠、菅谷館を出発鎌倉に向う
　　6 月 20 日　重保、稲毛重成に招かれ鎌倉に着く
　　6 月 21 日　時政、平賀朝雅のざん言により重忠親子も誅することを謀るも、北条義時・時房、重忠を弁護す
　　6 月 22 日　この日の朝、重保、三浦義村に油井ヶ浜で討たれる
　　重忠、二俣川で大将軍義時、時房率いる大軍に襲われ重忠以下 134 名討死す
　　6 月 23 日　義時ら鎌倉に帰る。重忠の無実の死を悲しむ
　　7 月 8 日　北条政子、重忠余党の所領を与えられる
　　7 月 19 日　北条時政、牧ノ方追放される
　　7 月 20 日　義時執権となる
　　7 月 26 日　平賀朝雅、京都で討たれる
　　9 月 2 日　内藤朝親、新古今和歌集を持参し鎌倉に着く。重忠謀殺などを遅延の理由とする
1210　5 月 14 日　重忠の後妻の所領を安堵される
1213　9 月 19 日　重忠の末子僧重慶、日光山別当弁覚に謀反を企てたと訴えられる
　　9 月 26 日　忠末子重慶、長沼宗政のために誅される
1219　1 月 27 日　源実朝、八幡宮で公暁に殺され、続いて公暁も三浦氏に切られ源氏の正統絶つ

宅間上杉家概略

戦国時代に築かれた笹山砦城は、天正 18 年（1590）小田原合戦の際に、玉縄城の出砦であったと伝承される。
笹山の西方に鎌倉街道が通り、周囲を圧する高台に位置し、眺望もよい。開発される前は古井戸や柱穴跡もあったといわれるが、現在明確な遺構は見られない。（城と古戦場）

笹山砦に関しては、天正 18 年（1590）の小田原戦役の際、玉縄城の支砦であづたと伝えられるのみで資料はあまりない。位置は標高 82m ほどの小丘上であるとされ、宅地造成による破壊から免れているが、遺構には乏しい。この地は、後北条氏の頃、宅間伊織綱頼が永谷で 250 貫文を知行していたことが知られる（「小田原衆所領役帳」）。

宅間氏は、鎌倉時代の上杉重房から始まる名門。
足利尊氏のもとでは関東管領となり、扇谷・詫間・犬懸・山内の 4 家に分かれた。
1438 年、鎌倉公方の足利持氏と関東管領の上杉憲実が対立した永享の乱の際には、上杉憲直が足利持氏に味方して榎下城にて籠城し、のち自害。
1493 年（明応 2 年）2 月、道真像が時の永谷郷領主宅間上杉家の上杉乗国に霊夢となって現れ、これを畏れた乗国が社殿を造営し道真像を神体として安置したのが永谷天満宮の始まりとされる。
1582 年（天正 10 年）に宅間上杉家の上杉規富により再建された。
また別当寺院の貞昌院もこの際に建立された。

笹山砦は、東隣にある野庭の関城と同じく伝えの城の役目を果たしたものであろう。笹山の西方に鎌倉古道が通り、周囲を圧する高台に位置し、眺望も良い。開発される以前には、古井戸や柱穴跡もあったといわれているが、現在は山上に二本の高圧送電柱が建っているだけである。ただ西側の日限地蔵との間に信号機が設けてある所は堀切と推定される。（日本城郭大系）